

NEWS LETTER

# 都市史研究

THE URBAN HISTORICAL SOCIETY OF JAPAN

VOL.

63

2010  
0311

春寒ようやくぬるみ始めたこのごろ、年度末の気ぜわしい日々とは存じますが、皆さまお健やかに過ごしてでしょうか。さて、本年度最後の発行となります、都市史研究会ニューズレター63号をお届けいたします。

本号では2009年11月にぐるーぶ・とらっど3と共催したシンポジウム「伝統都市の比較史」のご報告を兼ねて参加記を掲載いたします。また、本研究会の活動成果をもととした出版物を二冊ご紹介させていただきます。なお、2010年1月14日に開催されましたラウンドテーブル「18世紀の都市と出版業——ロンドンと江戸——」につきましては、次号にてご報告させていただきます。

---

## 都市史研究会シンポジウム「伝統都市の比較史」

2009年11月14日から15日にかけて東京大学法文1号館215番教室においてシンポジウム「伝統都市の比較史」が開催されました。例年に比べ変則的なプログラムとなりましたが、両日で総勢78名の方にご参加いただき活発な議論がおこなわれました。以下では当日のプログラムと参加記を掲載いたします。

1月14日（土）ラウンドテーブルⅠ 14時～17時30分

ラウンドテーブルⅠ「民衆世界——都市社会の比較史——」

書評1）高澤紀恵著『近世パリに生きる——ソシアビリテと秩序——』（岩波書店、2008）

評者：吉田伸之（東京大学）

書評2）高澤紀恵・アラン・ティレ・吉田伸之編『パリと江戸——伝統都市の比較史へ——』（山川出版社、2009）

評者：河原温（首都大学東京）

全体コメント：林田伸一（成城大学）・杉森哲也（放送大学）

司会：多和田雅保（横浜国立大学）

11月15日（日）個別報告＋ラウンドテーブルⅡ 9時30分～17時20分

個別報告

三倉葉子（東京大学）「近代京都の町と土地所有——北之御門町を事例として」

戸田穰（東京大学）「建築・出版・イメージ」

西坂靖（専修大学）「江戸の呉服店の売場と奉公人——三井越後屋を事例として」

## ラウンドテーブルⅡ「空間と社会」

書評1) 伊藤毅編『バスティード——フランス中世新都市と建築——』（中央公論美術出版、2009）

評者：高橋慎一郎（東京大学）

書評2) 高橋慎一郎・千葉敏之編『中世の都市——史料の魅力、日本とヨーロッパ——』（東京大学出版会、2009）

評者：伊藤毅（東京大学）

全体コメント：伊藤裕久（東京理科大学）・三枝暁子（立命館大学）

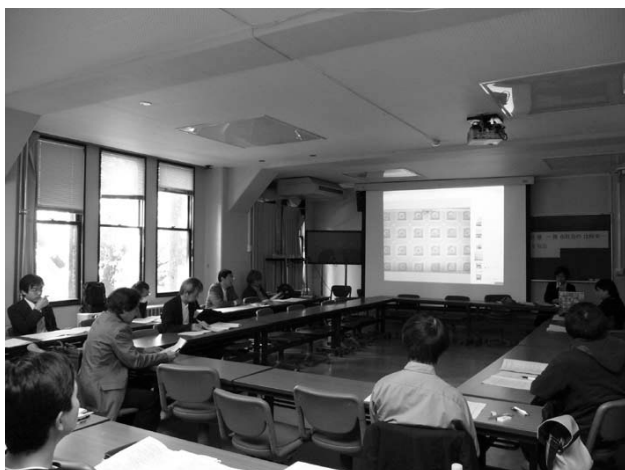
司会：岩淵令治（国立歴史民俗博物館）

### 参加記

昨年11月14日・15日の2日間にわたって「伝統都市の比較史」と題されたシンポジウムが開催された。1日目は「民衆世界」をキーワードにした書評が2本、2日目は個別報告が3本と「空間と社会」をキーワードにした書評が2本行われた。紙幅の関係上、また筆者が個人的な事情で2日目しか参加できなくなってしまったことから、ここでは、2日目の報告を振り返りつつ、若干の感想を述べることにしたい。

午前中は個別報告にあてられた。三倉葉子氏による「近代京都の町と土地所有」は、西陣の北之御門町における土地所有の実態と町との関係に着目した報告であった。明治以降、一部家持による土地集積が進み、彼らが町運営を主導したこと、一方で町財政における借家人の経済的負担は拡大していったことなどが指摘された。事例を丁寧に分析し、近世において糸仲買が集住していたという北之御門町の特殊性に留意しつつ、京都の他の町との類似点・相違点も視野に入れた意義深い報告であったように感じた。戸田穰氏による「建築・出版・イメージ」は18世紀フランスの建築家ルグランに焦点をあて、その著書「建築全史」の企図を解き明かそうとする報告であった。同時代のデュランとの比較、すなわちデュランが各民族による建築の差異を消去する方向で建築を相対化しようとしたのに対し、ルグランはそうした差異を微細に描き出すことを通して建築を相対化しようとしたという指摘など、シンポジウム全体のテーマとも通じるものがあると感じた。西坂靖氏による「江戸の呉服店の売場と奉公人」は、三井越後屋の売場について、その数や売上高の近世を通じた変化を、奉公人の勤務事例とも関連付けながら分析した報告であった。売場別の売上高の変化には、店内での位置に加え、担当者の力量が大きく関わっていたこと、とはいえ、そうした「売場巧者」が必ずしも相応の昇進を遂げるわけではないといった指摘など、そもそも売場とは振売を店内に取り込んだものであるという吉田伸之氏の説が連想されて、非常に興味深いものであった。

午後は、高橋慎一郎氏と伊藤毅氏が互いの編著を批評する形で書評が行われた。その後の全体討論の場では、大きなテーマの1つとして比較の方法が取上げられたように思う。史料の素材感を大事にしつつも、それだけで終わらず、たとえば「伝統都市」という括りを用いて、軸を意識しつつ比較をするべきなのではないか、という指摘がなされる一方で、最



個別報告の様子（2日目午前）



ラウンドテーブルの様子（2日目午後）

初に比較軸を設定して、共通点・相違点を挙げて終わりにするのではなく、史料に立ち戻って比較軸を意識していくことが重要である、方法としての比較であり、目的としての比較ではないという見解も提示された。とは言え、両者は全く相反する説であるわけではない。最終的にはそれぞれの時代における都市の特徴を浮かび上がらせようという点で両者は共通しているように思う。今回の議論は「時代区分論」と似た面があるという指摘が討論中になされたが、同感である。

それぞれの報告それ自体が意義深いものであったのは勿論のこと、「比較」とはどのようなことか、あるいは、そこにどのような意味があるのか、を考えさせられた今回のシンポジウムであった。

安田智昭（東京大学大学院人文社会系研究科）

---

## 出版物のご紹介

都市史研究会の活動成果より以下の出版物が先月刊行となりましたので、内容をご紹介します。『年報都市史研究』17号では、2008年11月に開催されたシンポジウム「遊廓社会」が特集されています。ぜひご一読ください。

### 都市史研究会編 『年報都市史研究』17号 山川出版社 2010年2月刊行

#### 特集「遊廓社会」

- 佐賀朝 「問題提起——近世～近代「遊廓社会」研究の課題——」
- 神田由築 「近世・近代移行期における甲府の遊所——宿場から遊郭へ——」
- 人見佐知子 「北陸・港町遊所の形成——加賀藩金石町相生町新地を事例に——」
- 相馬英生 「八戸湊の飯盛女——船小宿・出稼ぎ・祭礼——」
- 吉田ゆり子 「幕末維新时期における横須賀大瀧遊廓」
- 松田法子 「温泉場の「三業」空間——昭和初期熱海における料理屋・待合・置屋——」
- 齊藤俊江 「近代飯田遊廓における娼妓の生活」
- 伊藤毅 「失われた飯田遊廓の建築」

#### 論文

フランソワ・J・ルージュウ、竹下和亮訳 「18世紀フランス都市エリートの居住戦略」

#### 研究ノート

安部俊治 「十六世紀後期伊達領長井・越後間の交通路と支城主」

#### 書評

岸泰子 杉森哲也著『近世京都の都市と社会』（東京大学出版会）

#### 新刊紹介

#### 時評

### 後藤雅知・吉田伸之編『山里の社会史』 山川出版社 2010年2月刊行

- 後藤雅知 「18世紀中期岩槻藩総分領における堅炭生産の構造」
- 武部愛子 「川越藩の江戸城御用炭納入システム」
- 前澤健 「樽木代村と地域社会——樽木代金納の開始と買い納め村」
- 吉田ゆり子 「『家』の記録——信濃国『熊谷家伝記』の史料的検討」
- 脇野博 「山里の社会集団——杣と日用」

- 江下以知子 「明治10年代前半の山林開発と地域——東京石灰会社と諏訪郡湊村の官林」
- 町田哲 「近世阿波山村の名と『壺家—小家』関係の特質——美馬郡東端山の村落秩序」
- 斎藤紘子 「泉州泉郡春木川の村落秩序と山の用益」
- 吉田伸之 「山里の分節構造——信濃国伊那郡清内路村を事例として」

## オランダ・フリースラントの色

宮脇哲司（東京大学）

2009年に立ち上げられた沼地研究会の現地調査に同行する形で、三度、オランダを訪れた。始めにその概要を述べさせていた

たく。一度目は2月末から3月初頭、本調査を行う場所を選定するための予備調査であり、実質八日間で23都市を巡るという超強行日程であった。北ホラント州、南ホラント州、ユトレヒト州ゼーラント州の大きさまざまの都市を訪れた。帰国後、現地カウンターパートとのやり取りの中で現地調査候補として、未訪問のフリースラント州が浮かび上がり、その視察を目的としたのが、9月末、二度目の渡蘭である。これは直後の本調査を前提としており、11都市の実見と現地の協力者（州庁舎等、関連役所の担当者と現地研究者）とのミーティングを5日間で行う、前回同様の強行日程であった。そして10月末から11月、2回の予備調査を踏まえ、フリースラント州の3都市、Sloten、Franeker、Harlingenで調査を展開したのが三度目である。この時は来年度、同じくフリースラントで調査を実施するための予備調査も兼ねており、来夏、再び訪れる予定である。

以上、私がオランダを訪れた簡単な経緯であり、今回は二度訪れたフリースラントに関する話題を中心に報告させていただきたい。

### 特異点、フリースラント

フリースラント州とはオランダに11ある州のひとつで、北海に面し、アイセル湖をはきんで北ホラント州と向かい合う。州都はLeeuwardenである。日本においてその地名度は如何ほどであろうか。恥ずかしながら、私は沼地研でその名が出るまで全くの無知であった。ひとまず、その一般的特徴を述べておこう。

面積は約57,000km<sup>2</sup>で、内40%以上が水域である。州内の人口は65万人ほど、人口密度192人/km<sup>2</sup>はオランダ11州中、最も低い。市街地を外れば広大な牧草地で、道路から狭い堀の向こう側には牛や羊が牧草を食む景色が広がる。紛うことなく、田舎である。

フリースラント州と他の州との最も大きな違いが言語である。当然オランダでの公用語はオランダ語であるが、フリースラント州はオランダ内で唯一オランダ語の他にフリジア語という言語を公用語とし、日常の言語として用いられている。地名の標識なども、オランダ語とフリジア語の両方で表記されている。詳しいことは専門外なのでよくわからないが、フリジア語はオランダ語の一方言というわけではなく、より英語に近い、異なる系統の言語とされているようだ。また、人についても、少数民族フリース人として他と区別されている。そういう背景を持っているため、

例えば旅行ガイドブックでは「自らの文化と言語に対して強い誇りを持ち、オランダ人社会に対して厳とその独自性を強調している」<sup>1</sup>と紹介されている。フィエールヤッペン（棒を用いて堀、運河を飛び越えるスポーツ）など独自の文化も数多くあるようだ。

### 人工微高地、テルプ

我々の専門領域に話題を近づけよう。フリースラント州にはテルプ（terp、複数形はterpen）と呼ばれるマウンド上の集落が数多く存在する<sup>2</sup>。これは、古くは紀元前500年ごろから、人工的に造られた微高地である。オランダといえば、その国の名前を出すまでも無く、低地であり、現在の国土の1/4が海拔0m以下、さらにアムステルダム、ロッテルダムなどを含むランドスタッドと呼ばれる中心地域のほとんどが海拔0m以下である。そのため、水を如何に統御するかが何よりも優先されてきた。端的に、オランダの都市の多くが中世期に築かれた堤防（ダイク）や堰（ダム）を由来とすることによく表れている。あるいは、古くは風車で行われていたポルダーと呼ばれる干拓地もまた、土地と水との闘争の産物である。それらオランダの利水技術の歴史の起源と位置づけられるのがマウンド集落、テルプである<sup>3</sup>。



代表的テルプ(Hallig Hooge)

テルプの模式図

さて、フリースラントを訪れた際、上に述べた予備知識を持っていたため、車窓から必死に探すのだが、一向に見つけられない。そこで、同行して下さった州の役人の方に尋ね、案内して頂いたところ、見つけられなかった理由が明らかになる。単純に、私には（車の中からというもあるが）丘と認識できるほどの大きさ、高低差が無かったのだ。案内されたものは非常に緩やかな勾配で、せいぜい1~2m周りから高いほど、また面積も非常に狭く、小さな教会を中心に数戸の住居が並ぶほどしかない。おそらく日本の感覚では丘と認識しない僅かな高低差が、オランダにおいて

<sup>1</sup> 『地球の歩き方』編集室編『地球の歩き方 A19 オランダ・ベルギー・ルクセンブルク 2008~2009年版』ダイヤモンド社、2008.6。

<sup>2</sup> 同様のマウンド上の集落は隣のフローニンゲン州にも存在するが、フリースラントではフリジア語のterp、フローニンゲンではwierdenと呼ばれ区別されている。両州で1200ほど現存している。

<sup>3</sup> 国内での、テルプについての研究として、姫坂幸明、石田壽一「低地オランダ初期集落の都市構成的特徴に関する研究 -北部フリースラント州・フローニンゲン州のマウンド集落について-」(『日本建築学会九州支部研究報告』第44号, 2005.3)がある。

は致命的な差であることを、そのときようやく実感するところとなった。土地が常に水難の危機にさらされてきたオランダでは、土地への情念が、我々とは根本的に異なるのであろう。テルプは、洪水に見舞われた際の避難場所でもあり、一面水に覆われる中、この丘が唯一水上に頭を出している画が非常に印象的であった。

### 一群の都市、エルフステーデン

先にフリースラント独自のスポーツ、フィエールヤッペンに触れたが、スポーツといえば、Elfstedentocht (エルフステーデントッホツ、直訳すると11都市の旅)が最も有名、かつ重要である。これは、冬季、凍った運河上で行われるアイススケートレースである。毎年レースに耐えるほど運河が厚く凍るわけではないため、毎年開催されることはなく、1997年が直近の開催である。レースは11の都市を巡る、全長約200 kmを一日で滑りきる(タイムは天候と大きく関連するため年によって大きく変わるが、優勝者すら10時間以上の場合も多い)非常に過酷なもので、中でも最も苛烈であった(気温、-18°C)63年のレースでは参加者の内完走したのは僅か1%、死者も多くでたという<sup>4</sup>。レースの希少さ、過酷さの故か、開催される年はオランダ中が注目する。日本で例えるならば吹雪の中の箱根駅伝のようなものなのだろうか…。現在の形式でレースが始まったのは1903年であるが、歴史はさらに古い。伝統的に冬季の都市間交通としてスケートが存在していたようで、それを示す絵画なども多い。

このレースの名称となっている11都市(エルフステーデン)こそが、我々の関心の中心となる。Leeuwarden、Sneek、IJlst、Sloten、Franeker、Harlingen、Bolsward、Stavoren、Hindeloopen、Dokkum、Workumの11である。これら11都市は中世期に都市特権を獲得しており、歴史的に、政治・商業等、様々な点でフリースラントの基盤となった都市であった。興味深いのは、フリースラントの人々が、この11都市のまとまりを非常に強く意識し、また、誇りと考えているらしいことである。スケートレースはその誇りの一端であり、また、この11都市を核として世界文化遺産登録を申請中であることに非常に顕著である。このように、複数の(2、3ではなく)都市間での繋がりを、住人自らがここまで強く打ち出すような例を、私は寡聞にして他に知らない。

11都市の中身はというと、その多様性に驚かされる。例えば、それぞれの都市のサイズである。最大のLeeuwardenは人口約9万人、旧市街から外部へ大きく拡大しており、地方の中堅都市といった趣である。一方、最小のSlotenは人工僅か700人ほど、旧市街外部への拡張はほとんどなく、その運河で囲まれた旧市街もほぼ250m×250mの正方形におさまってしまう。そもそもSlotenはオランダ国内の最も小さい都市として知られている。都市の定

義についてここで触れることは出来ないが、感情的には、集落といった方がしっくりくるように思えてしまう。このSlotenの様に、歴史的に重要な位置を占めながら、現状極小の都市の場合、むしろ、都市の拡大を阻止する何らかの意図が働いていたと見るべきだろう。サイズだけ見ても、11の都市は広い振れ幅を持っている。同様に、地勢、都市の核(教会、大学、港湾等)、言語(フリジア語以外にも、それぞれにまるで異なる言語、方言があるようだ)など、それぞれの都市の個性が強く観察できる。これら一見ばらばらの都市が、何故このように緊密な一群として認識されているのか、それを担保する下部構造(あえて‘インフラストラクチャー’と呼ぶ)をサルベージする事が大きなテーマとなる。アイススケートの舞台となる、冬季に凍りつく運河はその一つなのだろう。



17CのLeeuwarden  
(Tresoar, webアーカイブ<sup>5</sup>)



17CのSloten  
(Tresoar, webアーカイブ<sup>6</sup>)

### オランダの光、ダッチライト

ところで、オランダで何よりも私が感じたことは、オランダの空は日本の空と明らかに異なるということであった。語彙が貧弱なため、それを言葉にする事は難しいが、雲、その形、合間から届く日光、全てが既知のものとは異質に思われた。フェルメールを筆頭に、オランダで描かれた名画の数々への先入観も当然あるのだろうが。

これに関して興味深い映画がある。2003年に公開された『DUTCH LIGHT (邦題: オランダの光)』(監督: ピーター・リム・デ・クローン)。オランダ絵画で繰り返し描かれた、オランダの光、しかし、近年のアイゼル湖(ゾイデル海)の大規模な干拓により、それは失われてしまったともいわれる。本当に失われてしまったのか、そもそもオランダの光とはどのようなものか、を、様々な側面から検証するドキュメンタリー映画である。映画の顛末をここで語るような野暮はしないので、興味のある方には見ていただきたい。ただ、晴れた日に、フリースラントの広大で起伏の無い牧草地と、それを一文字に貫く運河沿いの道の上に立って空を見上げれば、誰もが何かを行わずにはいられないのではないか。私の友人は、指をそわそわさせながら、日がな一日雲のスケッチをして過ごしたいと呟いていた。もちろん、調査中の私たちに、そのような時間があるはずもなかったのだが。

<sup>5</sup> Tresoar (フリースラントの歴史文学センター)

<http://www.tresoar.nl/>

<sup>6</sup> 同上。

<sup>4</sup> 63年のレースをモデルとした映画『DE HEL VAN '63』が2009年12月にオランダで公開されている。



---

News Letter 都市史研究 Vol. 63  
2010年3月11日発行

事務局：〒113-0033 文京区本郷7-3-1 東京大学大学院人文社会系研究科日本史学研究室内  
編集担当：三倉葉子（東京大学大学院工学系研究科建築学専攻）  
レイアウト原案：岩本馨（京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科）